

キャリアデザイン学部

【2025 年度 大学評価総評】

大がかりなカリキュラム改革の実施初年度にあたる今年度、執行部が掲げる重点目標は適切であり、改革の成果は中期的な課題として当然ながら数年間見守っていく必要がある。本学部のように設立が比較的新しい学部は、時代の変化と共に「完成形」はどのような姿なのかを模索し続けることを宿命づけられている。専任スタッフ数が限られている状況で、新たな課題に対応して進歩していくためには、「会議・業務の合理化および有効性の高い業務への選択と集中」による「教員負担の軽減」に努めなければならない、苦勞が察せられるところである。

その中で、学部独自の自己点検表や、それを共有する FD ミーティングなどは、「発達・教育キャリア」「ビジネスキャリア」「ライフキャリア」の三領域の中で、教育系や経営系の専門性を活かした、本学部ならではの取り組みとして高く評価できる。また、「研究」への注力に関して、学部教員による共著『キャリア・スタディーズ：これからの働き方と生き方の教科書』（JMAM）を出版して広く周知を図ったことは、極めて高い評価に値するのではないかと。

当面は、新カリキュラムの滞りのない運用とその成果を見定めていくとともに、教員の世代交代が加速することも見据えて、学部アイデンティティの継承と新たな進化に関するビジョンを共有し、卒業生・学部生とともに魅力的な学部を「共創」していくことを期待したい。

【2025 年度 自己点検・評価結果】

I. 改善・向上の取り組み

(1) 2024 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2024 年度大学評価結果総評】（参考）

年3回学部 FD ミーティングを開催し授業担当教員の報告を通して現状や課題を共有しているほか、授業の質を確保するために、兼任講師の担当科目に課題が生じた場合には専任教員が改善に向けた対策を行うなど、教育体制の向上について意欲的に取り組んでいる。また、学外での体験学習が重視されており、その成果の可視化にも腐心している。秋学期の最後の数回のゼミを公開して他のゼミと相互に学べるようにするという試みは、機敏な動きであったようであるが、斬新であり、今後の成果に注目したい。学生の受け入れの分野でも、合格者説明会の開催など、受験合格者への積極的なアプローチを行っている。

他方、大学院とも関連するが、教員の負担増が問題になっており、負担減のための学内業務効率化が進められている。

専門分野の性格から、カリキュラムを一定期間で見直していくことがとりわけ重要と考えられるが、まさに今、10 年来の大規模カリキュラム改革を実行中であり、来年度実施を目指して、現在準備を進めている。英語科目についても近年のグローバル化を考慮し、二年度英語の必修化により英語学習の強化を図ろうとしており、改革の成果が注目される。1、2 年次に単位を多く取り、3 年生で就活をする、という現在の学生のスタイルに対して、3 年次から履修可能な専門科目を配置する試みは特に注目される。

【2024 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

本学部は「研究のキャリアデザイン学部」をビジョンに掲げ、各教員が先端的あるいは高度な学術研究を推進することこそが教育の質を引き上げ、ひいては有為な人材の育成および社会課題の解消等に貢献しようとの信念を教員間で共有している。この実現に向けて、教員の負担軽減は最も重要な課題の一つであり、会議・業務の合理化および有効性の高い業務への選択と集中を進めている。なお、2024 年度大学評価結果総評において、「合格者説明会の開催など、受験合格者への積極的なアプローチを行っている」との評価をいただいたが、引き続き同説明会を行い、その効果の検証も行っていくたい。

一方、新カリキュラムの策定にかかる手続は完了し、本年4月より新カリキュラムの適用が開始されている。移行期においては旧カリキュラム適用の学生に不利益が生じることのないよう、きめ細かな支援を行う必要がある。

(2) 改善・向上の取り組み（教育課程およびその内容、教育方法）

アセスメント・ポリシーに基づき、ディプロマ・ポリシーに示した学習成果を把握しましたか。結果を学部としてどのように評価しましたか。 《対応する大学基準：学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価していること。》	S. 学習成果が達成できていることが確認できた A. 学習成果が概ね達成できていることが確認できた B-1. 学習成果が達成できていないものがあつたことを確認できた B-2. 学習成果の達成度を確認するには、測定方法が不十分であることが確認できた B-3. ディプロマ・ポリシーの見直しの必要性を確認できた	A（学習成果が概ね達成できていることが確認できた）		
上記の選択をしたのはなぜですか。実施主体、測定対象や測定方法を踏まえて理由を具体的に記入してください。				
《理由》 本学部では、ディプロマ・ポリシーに定める六つの学修水準を満たしているか否かについて、主要科目群の到達目標および履修成果の点検を絶えず行っている。具体的には、学部独自の「自己点検表」というツールを用いて、主要科目（講義系科目、実践系科目）の担当教員が到達目標の達成状況等を記述し、FD ミーティングにおいて改善すべき点について議論するシステムを構築している。当該システムは、当学部のある種の文化として定着している。また、授業改善アンケートや Halo（学習成果可視化システム）による履修および成績状況の分析、さらに授業参観、卒論要旨集およびゼミ別発表会等を通じて定性的・定量的の両面から学修成果の把握に努めている。 こうした複合的、多角的手法により、ディプロマ・ポリシーに掲げる六つの学修水準は概ね達成されていると認識している。なお、近年、ゼミ履修者および卒論の単位取得者がやや減少する傾向にあり、この点は現行カリキュラムの有効性に影響を及ぼしかねず、各年の状況を経年観察し、教員間で継続的に議論していく必要があると考える。				
教育課程およびその内容、教育方法について、学部として過去 4 年間（2021 年度～2024 年度）の中で特に改善・向上に向けて取り組んだ事例について、①～⑩の項目から《改善した項目》を選択し（レ点チェック）、その詳細について《改善内容》《改善した結果良かった点・課題》を記入してください。 《対応する大学基準：教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。》				
事例 <table border="1"> <tr> <td data-bbox="153 1153 435 1675"> 《改善した項目》 （複数選択可） </td> <td data-bbox="435 1153 1444 1675"> ☐ ①開講時期、開講頻度、授業時間等 ☒ ②授業科目の内容（目標、内容、開設授業科目数、授業科目の統廃合） ☒ ③授業科目の関係（各科目間の関係、ナンバリング、カリキュラムマップ、カリキュラムツリー、履修系統図等） ☒ ④教育方法（授業の形態、授業方法等） ☐ ⑤評価基準、評価方法 ☒ ⑥学生の履修（履修科目の登録上限、履修順序、必修科目と選択科目の設定、配当年次等） ☐ ⑦地域社会・国際社会・産業界等の社会との接続、大学院教育との接続 ☒ ⑧学習支援（単位の実質化のための取り組み、各種相談・サポート、学生の主体的な学習を促す取り組み） ☐ ⑨留学、インターンシップ、フィールドワーク等プログラムの充実 ☐ ⑩その他 </td> </tr> </table>			《改善した項目》 （複数選択可）	☐ ①開講時期、開講頻度、授業時間等 ☒ ②授業科目の内容（目標、内容、開設授業科目数、授業科目の統廃合） ☒ ③授業科目の関係（各科目間の関係、ナンバリング、カリキュラムマップ、カリキュラムツリー、履修系統図等） ☒ ④教育方法（授業の形態、授業方法等） ☐ ⑤評価基準、評価方法 ☒ ⑥学生の履修（履修科目の登録上限、履修順序、必修科目と選択科目の設定、配当年次等） ☐ ⑦地域社会・国際社会・産業界等の社会との接続、大学院教育との接続 ☒ ⑧学習支援（単位の実質化のための取り組み、各種相談・サポート、学生の主体的な学習を促す取り組み） ☐ ⑨留学、インターンシップ、フィールドワーク等プログラムの充実 ☐ ⑩その他
《改善した項目》 （複数選択可）	☐ ①開講時期、開講頻度、授業時間等 ☒ ②授業科目の内容（目標、内容、開設授業科目数、授業科目の統廃合） ☒ ③授業科目の関係（各科目間の関係、ナンバリング、カリキュラムマップ、カリキュラムツリー、履修系統図等） ☒ ④教育方法（授業の形態、授業方法等） ☐ ⑤評価基準、評価方法 ☒ ⑥学生の履修（履修科目の登録上限、履修順序、必修科目と選択科目の設定、配当年次等） ☐ ⑦地域社会・国際社会・産業界等の社会との接続、大学院教育との接続 ☒ ⑧学習支援（単位の実質化のための取り組み、各種相談・サポート、学生の主体的な学習を促す取り組み） ☐ ⑨留学、インターンシップ、フィールドワーク等プログラムの充実 ☐ ⑩その他			
《改善内容》 ※理由を含めて記入してください。 2021 年度～2024 年度に取り組んだカリキュラム改革は、本学部の学際性と専門性の向上を目指して実施した。本学部の特色の一つは、「発達・教育キャリア」、「ビジネスキャリア」および「ライフキャリア」という三つの領域を擁する学際性にあるが、旧カリキュラムはいずれかの領域を集中的に選択させることを志向していたがゆえに、本学部の長所が十分に発揮されていないとの指摘があった。そこで、新カリキュラムでは、領域に拘わらず、広範囲の科目群を履修できるようにし、学際性の向上を図った。一方で、3 年次以上には上級・応用科目を配置し、専門性の向上も図った。 本学部のもう一つの特色は、「講義型科目」と「実践系科目（旧：体験型科目）」を車の両輪のごとく、二つの柱として位置づけている点である。後者について教員の負担の大きい科目を廃止するとともに、PBL 型授業のクラスの増設をはじめ、新カリキュラムでは一段と魅力度の高い授業群を用意し				

た。この他、グローバル化の進展を見据え、2年生の英語授業を必修とする措置を講じた。 なお、FD ミーティングにおける授業改善報告の共有を通じて、教育の質の保証と継続的な改善サイクルが定着している。かかる取り組みは、教員間での意識共有と教育理念の具体化を推進する基盤として機能している。
《改善した結果良かった点・課題》 新カリキュラムは 2021 年度以降検討・準備を進め、本年は適用初年度である。本カリキュラムが目指す、学際性および専門性の向上、実践系科目の改善、および、語学教育の強化が学生の学修行動や学習成果にどのような影響を及ぼすかについては今後の検証が不可欠である。 今後は、履修動向や単位修得状況の分析、学習成果可視化システム（Halo）の活用、授業改善アンケートや学生モニター制度を通じたフィードバックの収集などを通じて、新カリキュラムの教育的効果を継続的に評価していく必要がある。

（３）改善・向上の取り組み（教員・教員組織）

教員・教員組織について、学部として特に「特色」として挙げられるもの、もしくは「課題」として今後改善に取り組んでいきたいものを《項目》の中から選択し、《内容》を記入してください。 ・教員組織に対する取り組み※ ※主に、教員が担う責任の内容、科目適合性の学内での判断、各教員の担当授業科目、担当授業時間の把握・管理（複数の所属、他大学・企業等との兼務教員について業務状況や教育効果含む）について ・教員の教育能力の向上、教育課程や授業方法の開発及び改善につながる組織的な取り組みとその成果 ・授業における指導補助者（TA 等）の活用に対する取り組み 《対応する大学基準：教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を安定的にかつ十全に展開できる教員組織を編制し、学習成果の達成につながる教育の実現や大学として目指す研究上の成果につなげていること。》 《対応する大学基準：教育研究活動等の改善・向上、活性化につながる取り組みを組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上につなげていること。》 《対応する大学基準：教員組織に関わる事項を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。》	
《特色または課題》	特色
《項目》	教員の教育能力の向上、教育課程や授業方法の開発及び改善につながる組織的な取り組みとその成果
《内容》 本学部では、教育課程および授業方法の継続的な改善に向けて、教員の教育能力の向上を組織的かつ計画的に支援している。なかでも特筆すべきは、年 3 回実施している FD ミーティングにおいて、年度末に作成する学部独自の自己点検表を意識した教育実践の点検・共有を制度化している点である。 年度末に作成する学部独自の自己点検表は、各授業担当者が自らの教育目標、授業設計、学生の学びの様子および受講者数の動向等を具体的かつ網羅的に記録・省察するものであり、単なる事後報告にとどまらず、教育の質保証と改善を両立させる仕組みとして有機的に機能している。FD ミーティングでは、これらの記録をもとに教員相互での情報共有と意見交換がなされ、好事例や課題の共有を通じて、教育方法の多様化や学修成果の可視化といった学部全体の教育力の向上に繋がっている。 また、この仕組みは本学部の理念の共有を促すとともに、教育課程の不断の見直しや授業方法の改善に向けた「自律的・組織的な内省サイクル」として定着している。	

Ⅱ. 全学的な自己点検・評価結果より見出された重点的な評価項目

（１）自由を生き抜く実践知を体現する取り組み

学部における「実践知」を体現する取り組みについて、改善・向上を図っていますか。 《対応する大学基準：教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。》 《対応する大学基準：社会連携・社会貢献活動の状況を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。》	S. さらに改善した又は新たに取り組んだ A. 概ね従来通りである又は特に問題ない B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。	A (概ね従来通りである又は特に問題ない)
上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。		
《内容》		

(2) オンライン教育の取り組み

オンライン授業は「2024 年度以降の授業編成における留意点について（報告）」（2023 年度第 6 回学部長会議資料 No. 7）に沿って、適した授業科目に用いられ、その有効性や教育効果を確認し、改善・向上を図っていますか。 《対応する大学基準：教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。》	S. さらに改善した又は新たに組み込んだ A. 概ね従来通りである又は特に問題ない B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。	A (概ね従来通りである又は特に問題ない)
上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。		
《内容》		

(3) 学生の声を活かした取り組み

学部レベルにおいて、学生の声を活かした改善・向上を図っていますか。 《対応する大学基準：教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。》	S. さらに改善した又は新たに組み込んだ A. 概ね従来通りである又は特に問題ない B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。	A (概ね従来通りである又は特に問題ない)
上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。		
《内容》		
授業レベルにおいて、学生の声を活かした改善・向上を図っていますか。 《対応する大学基準：教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。》	S. さらに改善した又は新たに組み込んだ A. 概ね従来通りである又は特に問題ない B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。	A (概ね従来通りである又は特に問題ない)
上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。		
《内容》		

III. 2024 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
中期目標	現行の教育課程を、その効果を随時検証しつつ遂行するとともに、新カリキュラムへの移行が滞りなく行われるよう努める。	
年度目標	次年度からの新カリキュラムの運用開始に向けて、学則改正や時間割の決定等、整備面における対応を遺漏なく進めるとともに、旧カリキュラムの履修学生が不利益を被ることのないよう適切な配慮を講じる。	
達成指標	学則改正をはじめとする事務的な手続きを計画的に進める一方で、現行カリキュラムの履修学生に対してきめ細かく履修指導やアナウンスを行う。	
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	昨年度までに大枠を決定した新カリキュラムについて、時間割への配置、旧カリキュラムから新カリキュラムへの科目ごとの移行の実際の整理と共有、進級規定などの学則改正など、詳細を詰めることができた。旧カリキュラムの履修学生については、新カリキュラムへの移行に伴い廃止となる授業について、学部掲示板における周知に加え、新入生オリエンテーション、新2年生ガイダンスでも周知をはかった。
	改善策	2025 年度より新カリキュラムの学生を迎えることとなるため、新入生オリエンテーションや新2年生ガイダンス、ゼミガイダンスなどの機会をとらえ、学部の教育課程・教育内容についての学生が理解を深められるように努める。また今後、読み替え科目が出てくることから、旧カリキュラムの学生に適切な周知を行う。

	質保証委員会による点検・評価	
	所見	2025 年度から始まる新カリキュラムの準備について、左記のような対応を実際におこなったため、適切だったと評価できる。また旧カリキュラムの履修学生に対する周知についても、適宜説明の機会を設けたため、十分に対応できたと評価できる。
	改善のための提言	学生からのフィードバックを重視しつつ、引き続き丁寧な諸対応が必要である。
	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
	中期目標	オンラインと対面それぞれのメリットを生かした授業形態の工夫をはじめ、より効果的な教育方法の実践に努める。
	年度目標	原則 100%対面での授業に戻したことにより、学生がより積極的・効果的に学びを深めていけるよう努める。
	達成指標	学部執行部や教務委員会の主導のもとで、授業改善アンケートの結果や各授業の履修者数のチェック、学生モニター調査等を通じて、学生が適切なかたちで学習に臨んでいるかを検証していく。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	体験型選択必修科目、キャリア研究調査法（質的調査・量的調査）およびゼミについて、応募・履修状況を教授会で把握し検討を行っている。 学生による授業改善アンケートの自由記述を執行部で確認・検討し、授業に改善を要する点があると判断した場合には、窓口教員、執行部、教務委員会、学務部が連携して対応した。 学生モニター調査では、2024 年度は留学生の学生モニター調査をおこない、レポート執筆における支援の必要性を把握した。
	改善策	国際交流委員会にて検討を進めている留学生支援のプログラムを確定し、実行する。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	左記授業（体験型・調査法・ゼミ）に関して、例年通り教授会にて現状が共有され、客観的な分析が継続されたため、適切だったと評価できる。その他授業についても、学生アンケートの結果等をもとに教員が真摯に対応し、必要に応じた改善に努めたため、十分に達成されたといえる。また留学生対象のモニター調査が実施され、改善点が特定できたことは、学部の中長期的な視点からも有益だったと評価できる。
	改善のための提言	留学生への支援策に関して、引き続き国際交流委員会を始めとして、具体的なプログラムの検討が必要である。
	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
	中期目標	学部のディプロマ・ポリシーの周知およびその達成に努めるとともに、学習成果可視化システム（Halo）の活用に努める。
	年度目標	学習成果可視化システム（Halo）の更なる活用の可能性を検討して実行に繋げる。
	達成指標	引き続き全体の履修動向を確認するとともに、特に成績不振の学生や留学生の学習状況を注視し、必要に応じて改善策を講じる。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	学年（および学期）ごとの履修・単位取得状況を精査し、年次が進むにつれて著しい偏りが生じていないかどうかを確認した。また成績下位の学生における状況を把握し、一年次のうちから早期の支援が必要であることを確認した。
	改善策	成績下位の学生は早くから躓きがちなことが明らかとなったため、一年次に最初の成績評価が出た時点から、キャリアアドバイザー等による速やかな支援を開始するための仕組みを構築する。
	質保証委員会による点検・評価	

	所見	履修・単位取得状況の精査、および成績下位の学生に対する状況把握が妥当な形で実施されたため、適切な対応だったと評価できる。
	改善のための提言	左記のキャリアアドバイザー等による、具体的な仕組みの構築が必要である。
評価基準		教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
中期目標		学部のディプロマ・ポリシーの周知およびその達成に努めるとともに、学習成果可視化システム（Halo）の活用に努める。
年度目標		学部の出口保証のシステムについて、引き続きより適切なあり方を検討する。
達成指標		昨年度から開始した、ゼミごとの卒論発表会の学部内公開の効果を検証しつつ、必要に応じて改善を加える。また、卒論要旨集のあり方についても検討を続ける。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	原則、各ゼミ時間内に発表会を公開で実施したことで、卒論執筆者を中心に多くの学生に発表機会を提供し、かつゼミ生同士のフィードバックの質も高まった。あわせて卒論要旨を学部掲示板に一定期間公開したことで、多くの学生の卒論概要を周知することが可能になった。
	改善策	より効果的な運営方法を模索する。今年度も卒論発表会に1年生が参加したケースが複数存在したが、より効果的な告知方法の検討が可能である。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	各ゼミによる卒論発表会に一年生の参加者もいた等、多様な学生が早期からの研究活動に参加することが促されたとみられるため、卒論や発表の質の向上にむけて、有意義な方向にあると評価できる。
	改善のための提言	下級生への告知の仕方を、より具体化することが期待される。
	評価基準	学生の受け入れ
中期目標		入学センターと緊密に連携しつつ、定員の充足および入学者の質の確保に努める。
年度目標		多様な入試形態による入学者について、学部における学習に支障なく取り組んでいるか検証し、必要に応じて対応を検討する。
達成指標		Halo等を通じて学習成果を把握し、必要に応じて入試制度の改善を図る。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	現段階において、特定の入試経路からの入学者が、学習上、特段の問題を抱えているということはないものと考えられるが、Halo（学修成果可視化システム）によって学修成果・教育成果を分析・可視化する中で、たとえば、累積GPA下位10%の学生は、1年次春学期から修得単位数が少ない傾向があり、早期からの支援が必要とされている等、入学者に対する学習支援のあり方に一定の示唆が得られている。 今年度は留学生について、学生モニター調査を実施し、その結果、口頭発表よりも試験・レポートの筆記に課題があることが把握できた。ゼミにおける個別対応以外にも一定の支援が必要な状況であり、当学部としては国際交流委員会による支援の可能性を模索していく。 今年度はまた、新島短大からの編入についても、先方の学科再編、当方のカリキュラム改革をめぐって、意見交換の機会を設けたが、これまでのところ同短大からの編入生の成績は良好な状況であることが確認されている。
	改善策	現状では、学生の学習成果に関してただちに入試制度を変更しなければならないほどの問題は見受けられないが、引き続き各学生の入試経路も念頭に置きながら学習状況を丁寧にモニターしていく。
	質保証委員会による点検・評価	

	所見	入試経路と、入学後の成績の関係性について、左記の通り入念な検討がなされたため、適切な対応ができたと評価できる。現時点で、経路と成績の関連はないであろうと把握できていること自体も、入試のあり方が適切に担保されているという意味で、評価できる。また新島短大の変化による当学部の対応も、柔軟かつ丁寧な形で同大学との話し合いによって実施されたため、適切であったと評価できる。
	改善のための提言	引き続き、入試経路と、入学後の成績の関係性は、今後も様々な形で検討を続けることが必要である。
評価基準		学生の受け入れ
中期目標		入学センターと緊密に連携しつつ、定員の充足および入学者の質の確保に努める。
年度目標		本年度入学者数が著しく増加したことにより、新入生及び在学生在が学習上の不利益を被らないよう最大限配慮する。
達成指標		各々の授業について履修者の動向を確認し、必要に応じて臨時増コマ等の対応策を講じる。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	語学や体験型選択必修科目をはじめ、各クラスに、教育効果と質の維持が可能な範囲内で数名ずつ履修者を上乗せするかたちで、増加した入学者を吸収し、学生の不利益を回避しながらクラスを編成する方針を立てることができた。 2年次の選択必修科目であるキャリア研究調査法（量的調査、質的調査）に関しては、教育の質を担保するためには1クラス当たりの定員を増やすことは難しく、2025年度、量的調査・質的調査1クラスずつの臨時増コマを実現することによって、従来通り20名以下の定員とし、きめ細かな指導が行き渡るように配慮した。
	改善策	本年度入学者数の増加に鑑み、2025年度入試においては文科省定員0.9倍を目標として入学生数を絞り込んでいる。次年度開講後も引き続き各授業における学習状況を確認しながら、学生の不利益を回避していく。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	入学者数の増加という今年度特有の問題に対して、左記のような諸対応を実施し、特段の学生からの不満や不利益が聞かれなかったことは、対応の具体策が適切であったと判断してよい。また2025年度入試にまで対応を考慮したことも、適切な対応と評価できる。
	改善のための提言	2024年度入学の在在学生には、各授業における学習状況への確認等、今後も継続的対応が必須である。
	評価基準	教員・教員組織
中期目標		3つの領域それぞれの専門性やバランスに留意しつつ、研究・教育における学際性のさらなる伸長に努める。
年度目標		教員採用人事においては学部の特性や専門領域を十分に考慮しつつ、学部内の合意形成を図りながら推し進める。
達成指標		採用人事に関わるプロセスを再検証し、透明性・持続性等を担保すべく必要に応じて内規の見直しを行う。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	採用人事の過程における、各領域からの意見反映の機会の確保等について不明瞭な部分が見受けられたため、執行部を中心に人事に関わるフロー図を作成し、教授会での了承を得たのち、今後の採用人事の際に活用することとした。
	改善策	今年度作成したフロー図にそって今後の採用人事を進めていくこととする。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	新任教員の採用における可視化が進められたため、一定の成果があったと評価できる。

	改善のための提言	フロー図を忠実に用いた採用人事が期待される。
	評価基準	学生支援
	中期目標	入口から出口までを見すえて継続的な学生支援を行い、多様な学生が意欲的に学べる環境を整備する。
	年度目標	多様な入試経路による学生が十分な学習成果を上げることができるよう、多角的に支援していく。
	達成指標	キャリアアドバイザーや国際交流委員会による支援を一層充実させていくよう努める。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	学部と連携した相談活動として、キャリアアドバイザーによる留年・休学者・成績不振者面談の実施に加え、年間を通して学生の要望により個別面談を実施した。また、国際交流委員会にて、留学生支援のためのプログラムの検討を開始した。
	改善策	国際交流委員会にて検討を進めているプログラムを確定し、実行する。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	留年・休学者・成績不振者に対するキャリアアドバイザーの対応、また留学生に対するモニター調査が適切に実施されたため、肯定的に評価できる。
	改善のための提言	国際交流委員会の検討するプログラムが、早期実施に至ることが期待される。
	評価基準	社会貢献・社会連携
	中期目標	教育・研究を通して積極的に社会貢献・社会連携を行い、そのプロセスや成果を広く発信していく。
	年度目標	引き続き学部主催シンポジウムや体験型科目の成果報告等を広く公開していくとともに、ウェブサイトを通じた発信をより充実させていく。
	達成指標	新カリキュラムの運用開始に向けて「キャリア・スタディーズ」をテーマとする書籍を刊行し、内外への周知を図る。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	日ごろの学部の教育・研究の成果を一冊にまとめた、学部教員による共著『キャリア・スタディーズ：これからの働き方と生き方の教科書』（JMAM）を出版し、学部および大学院の在学生に配布するとともに、シンポジウム等の機会に広く周知を図った。また学部シンポジウムは、統一テーマのもとに数本の動画（教員同士の対談等）を作成し、ウェブ公開を通じてより広範なアクセスを図った。
	改善策	動画公開という形式に関しては、撮影の手間や公開の時期・範囲など、考慮すべき点が少なくないため、今後の課題として引き続き検討を加えていく。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	当学部教員が共著となった書籍を発刊し、学部生だけでなく、学部外にも、学部教員の教育・研究の成果が拡散されたことは、中長期的にプラスだったと評価できる。また学部シンポジウムは、時代のニーズに合わせた実施形態を模索した点で、肯定的に評価できる。
	改善のための提言	シンポジウムのあり方については、とりわけ動画公開に伴う諸点に関して、引き続き検討を重ねていく必要がある。
【重点目標】 次年度からの新カリキュラムの運用開始に向けて、学則改正や時間割の決定等、整備面における対応を遺漏なく進めるとともに、旧カリキュラムの履修学生が不利益を被ることのないよう適切な配慮を講じる。		
【目標を達成するための施策等】		

カリキュラムの改定に必要な各種手続きを遅滞なく進めつつ、新カリキュラムへスムーズに移行することができるよう、教員の側の準備を進める一方で、現行カリキュラムの履修学生に対しても混乱が生じることをないようきめ細かなサポートを行う。
【年度目標達成状況総括】 今年度はカリキュラム改革をめぐる一連の準備作業の最終年度に当たり、次年度から始まる新カリキュラムへの移行がスムーズに行われるよう、学則の改定や担当教員の配置、兼任教員や在校生への説明など、必要な手続きを滞りなく進めることを第一の目標とし、おおむね予定どおりに実施することができたため、全項目において自己評価をAとした。質保証委員会による点検においても、この評価が妥当であると判断された。今後は新カリキュラムを実際に運用していく過程で生じうる課題に注意し、必要に応じて丁寧な対応を心がけていくこととしたい。また、Haloや授業改善アンケートの分析を通して浮かび上がってきた問題（たとえば学習上の早期の躓きの傾向や、留学生の日本語能力の不足、等）について、今後具体的な対策を講じていくこととしたい。

IV. 2025 年度中期目標・年度目標

評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
中期目標	現行の教育課程を、その効果を随時検証しつつ遂行するとともに、新カリキュラムへの移行が滞りなく行われるよう努める。
年度目標	新カリキュラムの運用が開始となるため、実施状況を評価・検証しつつ、旧カリキュラム適用者への支援も継続し、移行期の混乱を最小限に抑える。
達成指標	新カリキュラムにおける学生の履修や進級の状況を把握する。 旧カリキュラム適用者に対する履修指導やガイダンスによる周知を継続し、不利益の未然防止に努める。
評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
中期目標	オンラインと対面それぞれのメリットを生かした授業形態の工夫をはじめ、より効果的な教育方法の実践に努める。
年度目標	教員による授業相互参観等により、授業改善の好事例をFDミーティング等で蓄積・共有し、教育方法の多様化を促進する。
達成指標	授業（体験型・調査法・ゼミ）の履修状況を教授会で共有する。 授業改善アンケートの結果や各授業の履修者数のチェック、学生モニター調査等を通じて、学生が適切なかたちで学習に臨んでいるかを検証していく。 対面授業を基本としつつ、教育効果を高めるICT活用やアクティブラーニング型授業の事例を収集する。
評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
中期目標	学部のディプロマ・ポリシーの周知およびその達成に努めるとともに、学習成果可視化システム（Halo）の活用を努める。
年度目標	学習成果可視化システム（Halo）の更なる活用の可能性を検討して実行に繋げる。
達成指標	体験型科目ガイダンス時にカリキュラム・ポリシーと同時に学部のディプロマ・ポリシーの周知を行う。 学習成果可視化システム（Halo）を活用し、学年（および学期）ごとの履修・単位取得状況を精査する。
評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
中期目標	学部のディプロマ・ポリシーの周知およびその達成に努めるとともに、学習成果可視化システム（Halo）の活用を努める。
年度目標	学部の出口保証のシステムについて、引き続きより適切なあり方を検討する。
達成指標	昨年度は、各ゼミによる卒論発表会に一年生の参加者もあった。今年度のゼミ選択時で改めて卒論要旨集を活用するようにゼミ履修ガイダンスで周知する。
評価基準	学生の受け入れ
中期目標	入学センターと緊密に連携しつつ、定員の充足および入学者の質の確保に努める。

年度目標	多様な入試形態による入学者について、学部における学習に支障なく取り組んでいるか検証し、必要に応じて対応を検討する。
達成指標	HaLo 等を通じて学習成果を把握し、必要に応じて入試制度の改善を図る。
評価基準	学生の受け入れ
中期目標	入学センターと緊密に連携しつつ、定員の充足および入学者の質の確保に努める。
年度目標	指定校の選定状況が適切であるか、検証し対応を検討する。
達成指標	指定校から入学した学生の成績・履修状況および指定校からの出願状況を確認し、それを踏まえて指定校の継続・見直し・選定を行う。
評価基準	教員・教員組織
中期目標	3つの領域それぞれの専門性やバランスに留意しつつ、研究・教育における学際性のさらなる伸長に努める。
年度目標	本年度は採用人事の予定はないものの、中長期的な観点から今後の人事戦略について検討する。
達成指標	各領域における年齢構成および専門領域を、中長期的にどのように編成していくかについて検討する。
評価基準	学生支援
中期目標	入口から出口までを見すえて継続的な学生支援を行い、多様な学生が意欲的に学べる環境を整備する。
年度目標	キャリアアドバイザーや国際交流委員会によるこれまでの学生支援を継続しつつ、今年度は新たに、留学生支援の具体的取組みを検討する。
達成指標	例年通り、キャリアアドバイザーによる留年学生・休学者・成績不振者への個別面談、および必要に応じた当学部学生への個別面談を実施する。また留学生支援の新たな取組みを実施する方向で具体策を形にする。
評価基準	社会連携・社会貢献
中期目標	教育・研究を通して積極的に社会貢献・社会連携を行い、そのプロセスや成果を広く発信していく。
年度目標	引き続き学部主催シンポジウムによってキャリアをめぐる課題と知見、取り組みを広く公開していくとともに、ウェブサイトを通じた発信をより充実させていく。
達成指標	学際的なアプローチである「キャリアスタディーズ」を通して、これからの時代にふさわしいキャリアのあり方を探求するシンポジウムを開催する。
【重点目標】 新カリキュラムが適用開始となるので、本年度は1年生には新カリキュラム、2年生以上は旧カリキュラムが適用される、移行期の最初の年度となる。本年度の重点目標は、当該移行を円滑に進めることである。とくに、旧カリキュラム適用の学生に不利益が生じないようにきめ細かな配慮を行う必要がある。 【目標を達成するための施策等】 新・旧カリキュラム適用双方の学生の要望に真摯に耳を傾け、不都合が生じている場合にはきめ細かなサポートを行う。また、教授会において当該情報を共有し、各教員の授業においても適宜調整を行うよう努める。	